

諱話浮世風呂初編

下





中村文藏

「それ見旅人おめ人杯、芝居もえぬ癒ふ引りり中と
姉さんの若下の時ふゆとア「おいら杯、お作匠様と下ると
毎日めまア「までもあり下るる下る下るでもあり人の世話
あやアあうねんおきそておぬ人新えんと亀さんと平さんと
三人で高番合と三津五郎と幸四郎のたてをまこつあめの
あのおとよの内の際までのお筆を拵てギツギとあらんごらの
亀公方エとツんとお流こア、啼こする形を考らるけがのあを
らんが強へく高番合とらふ考らるる下る下る杯とあうと

いんごうく 啼^なぬ ぬ^ぬぬ^ぬ 二^ニ何^{ナニ}の^ノアノ^{アノ}啼^なぬ^ぬ 幸^{さい}一^一 鉄^{てつ}えん^{えん} 是^{こゝ}は^は 派^{はい}

あま^{あま}又^{また}お^お上^{かみ}中^{ちゆう} トけまへまごとの内でも
ゆとるい子まき  あとりき子あなまのこらんを
ゆのもあのらうこことばがあるとまらる

幸^{さい}さん^{さん}あ^あら^らじ^じけ^けど^どり^りや^や 能^{のう}の^の豊^{とよ}国^{こく}の^の給^{たま}ご^ごよ^よ 威^い勢^{せい}が^が能^{のう}せ^せ

ま^ま又^{また}お^おけ^け源^{げん}之^の助^{すけ}人^{ひと}能^{のう}く^くあ^あさ^さの^のう^う あ^あの^のら^らが^があ^あぢ^ぢや^やア^アの^の

啼^なぬ^ぬ源^{げん}之^の助^{すけ}人^{ひと}長^{なが}員^{いん}ご^ごう^うの^の あ^あを^をあ^あへ^へも^もの^の上^{かみ}方^{かた}へ^へも^もの^の源^{げん}

之^の助^{すけ}の^の給^{たま}斗^と買^{かひ}て^てよ^よら^らふ^ふあ^あの^の 吉一^一 吉お^おけ^け源^{げん}之^の助^{すけ}人^{ひと}あ^あら^らじ^じを^をま^まら^ら

こ^この^の衆^{しゆう}人^{にん}を^をか^かけ^けら^らう^う 悪^{あく}い^い 堪^{かん}忍^{にん}を^を終^{はら}へ^へる^る あ^あり^り人^{にん}も^も

時^{とき}が^が真^まと^とや^や終^{はら}へ^へる^る 是^{こゝ}は^は 病^{びやう}を^をま^まら^らう^う ち^ちは^はけ^け治^ちる^る あ^あり^り

糸が男之助を楢の下りへ出る所まであり其時嵐ふる

巻物を啜て出さるしちのらひや丈夫やア幸さん不扇でおねるの

あつぱやく只這出てあつめをうらひされるぞういばア威勢

が移んせまア亀えん丈夫のあの幸さん不踏らねて居あつの

とさあ移へ私へいらまどやア私が男之助あつ嵐の方

強くあつめのをそそあつめもらやごおれが嵐でギツクリを

さると幸さんがあつめを痛くおどらうアそんなら後不

せらア皆が這入るあつめアもういおあつやアん

四文でござりまます△何糠四文くらゝの字をアミキんで
奴と讀ハ糠さう糠のやうな誰あもつらるやうな虫け奴とらふ字
ハよそとくと糸賓奴下てとくと刷下奴と讀む番匠考
移くハイ存ませぬ考らざア省して中ら^{ナニカ}其糠代も
入て四文クハ工糠むらで四文でござりまます△糠代クハイ
△支で△イ糠代番匠代が四文と賣てあるけら
△アミキハアミキナダ あれハササの看板クハイさやうでござりまます△
欲はるまハイ湯でわらうの食るハイ法方ら弘をたのまれ

目く
お群
まきま
まきま
まきま



目く
まきま
まきま
まきま
まきま
まきま
まきま
まきま
まきま
まきま

鳳皇の身ハ
 熟材臭く
 あつて
 ようやく

ようやく

水鳥の

其時香頭よ

小説と

供了るや余子一ツの杖あり

この

酒碎年老役入堂

酒碎年老役入堂

あま碎ぬぐむ答り

ちび

ちび



八や

まい

まい

ながい

ながい

あくび

まては披弘きまをへ
フム赤切をひくを膏ツ番頭

ハイ一をせ赤切がをひく移人ハイ一
イヤサ足へ赤切が切

て歩めれざらむを引てひくが能くや移人
但ト多赤切

が切らう時足がひく移人むもせう
痛くて一足も引

れぬるのあらうがのひくねぬるの
あるまへ但一あるう

番頭ナナセ赤切がをひくを膏
ハイをひくぬる

とらふ心でどらうまを
テ赤切のひく番頭をひく

らあまがあらぬのうま
アトこちへ風流人
カでる人アレバ人

湯^ゆクハ人散^ちク。ハ人あれハ人^{ひと}流^{りゅう}でござりまさと「ハム流^{りゅう}ク。ハテ。ちの
 ぬ^ぬとあ^あごま。風流^{ふうりゅう}とあるく風^{ふう}サ^サとごま「ハ人^{ひと}流^{りゅう}とヤテ。一人^{ひとり}で
 八^{はち}のま^ま似^にを^をば^ばま^まと「テ^テ奇^き妙^{みょう}者^{もの}を^を賣^うる^るい^いら^らと^とど^どする
 の^のど^ど「ハ^ハ工^{こう}賣^う物^{ぶつ}で^でござ^ごり^りま^ませ^せね^ねる^る物^{ぶつ}で^でも^もあ^あい^いが^がア^アハ^ハと^とど^どお^おで
 ござ^ごり^りま^まと「サ^サその^{その}き^きが^が能^{のう}り^りと「六^む十^{じゅう}四^し文^{ぶん}位^いで^でござ^ごり^りま^ませ^せる^る「テ^テ
 安^{やす}い^いの^のど^ど「ハ人^{ひと}お^おハ^ハ文^{ぶん}お^おけ^け湯^ゆ銭^{せん}の^の安^{やす}い^い。その^{その}サ^サを^を吞^ので
 八^{はち}人^{にん}流^{りゅう}を^をあ^あご^ご。一人^{ひとり}お^おハ^ハ文^{ぶん}は^は八^{はち}十^{じゅう}四^し文^{ぶん}あ^あて^て湯^ゆ入^いる^る時^{とき}ハ
 一人^{ひとり}多^た十^{じゅう}文^{ぶん}拂^{ひら}ふ^ふ引^ひくと^と五^ご十^{じゅう}四^し文^{ぶん}は^は利^りが^があ^ある^る。好^{こう}く^くと^とど^ど待^{まち}よ。

己番頭賣物かんとしうりものであつたまのげせめて半はん分ぶん賣うてられぬかんとしうハテとんご

聞きちぐひかんとしうあねあねハ人ひと氣けいと中ちゆうて人ひとでござるござるまさとまさと井い人ひとハハどうどうてんご

一い井いけ方かたであつたままね他たあでささるるのでのでハテハテ扱さささくくら

買かふふささくくねね茶ちやがが益えき不ふちちめめのの一い井い井い氣けいををささるる盲めくら人ひとで

ござるござるままままハハテテ番頭ばんとう何なにをを云いつつてももいいららぬぬ男おとこががどどりりアア碎くだごごイイウウ

アアああちちハハ何なにががハハテテ讀よめめ入い虫むし

中ちゆうごごああねね不ふ讀よめめ終しゆうへへくく誰たれもも讀よままのの番頭ばんとうああねねああくくああままアア

何なにががハハテテ戲げ讀よ談だんとと讀よままののままとと一いくく解げ毒どく丸がんヲヲ

まけぬれツシテ手拭も新しいのをかてとるやれ砕ざるやれ

一風呂イマどろこナ己番己おれが草履草履ハ長刀長刀だらうが

襦中ぞらうが履履達達られてふさるぬぞ若若達達たら其代其代は

裏裏付付をあるぞ番番返返糸糸を付付やれト二二階階のちがちがアアのりく

二階二階ハ貸切貸切でござうまきとどろぞ下下ふ結成結成て下下さうま

一一番番返返お身お身いらろくのるををらふの竹竹知知でも二階二階ハ脱脱ぶ

貸切貸切とふどろと三百六十日三百六十日昼夜十二時昼夜十二時が間間飯飯も食食りぞ

茶茶も吞吞む宿元宿元の用用るも足足さぶふふ二階二階を借切借切て

茶も呑ま宿元の事... 二階を付けて

湯人をう這入て居る者がある。あるやうな室へ出せおれが

對面する。借切と奴があゝ不不存者とおれが利害は

説て聞せる。不弄貸切といふ訳の店向の坊方ぐふ戸棚

を皆貸買てごごうまきと。お脱まする場がごごうまきおお

かまのうの聞かのころの世話を中せるお方ご番頭おお

これも聞かのころの世話を中せる男ごハテそれでも店向の

イヤサ店向でも樽板でもおれが着物をおれが脱であれが

罌丸をおれが握ておれが湯へ這入れおれが俣ご湯へその

方やうめいの物ぜい銭ぎへあれが物ものごとら。湯ゆへ入らと刃やいばで借かり切きりの者ものが鬼おにの角かくの

らら體くわいの湯ゆの氣けをささめめてぬぬささううからら其その時とき湯ゆ銭せんをもおれ

ぬぬししられれまま。是これちちどどつつららるるゆゆいいああるるままいい。何なんぞぞああささとといいふ

居ゐるら奴やつががああれれをを見みてて笑わらああらら。不ふ届とどまま奴やつどど何なんががあありりいい。マイマイ。

室むろへへいい對あひてふふああるる。ううせせぬぬららああののれれ▲▲ニニククハハののおおんんととううアアとといいててモモシシ

是これくくああららううららままささららままいい。是こゝまま辭ことばややナナンンダダゴゴレレハハちちんんどど正ただ体ちんををああらら

ハハセセララウウハハイイ私わたくしハハ二に階かいのの番ばんををいいとと者ものででごごぞぞららままささとと二に階かいのの番ばん

ウウハハイイ番ばんハハ番ばん取とりりままでで功こうをを經こう移うつへへののごごナナニニよよししくくささらら聞きけけがが

えんあん... ナア... 下... トニ...

お市とらふ菓子でござりませうとてお市から饅頭でおくさ

なりのア碎^{さい}りやうも能^いりのイヤモとそんなおおををばけ

まさらして「おむらじ」の好物をねらうとておのふ

得^はもあつるまのぢごお及びねすてんそんなををあらめてま

外のをららして又あらうるる能^いらう。コ番^{ばん}取^とモウ一^{いつ}盃^{はち}を

と「イト」今^{いま}の番^{ばん}取^とを「湯^ゆをあらうるる糖^{あめ}をららして其^{その}

指^{ゆび}をあらて又各^{おのづから}別^{べつ}能^いの番^{ばん}取^との中^{ちゆう}へ入^{いれ}る物^{もの}の菓子^{かし}

の碎^{さい}けと粉^{こな}ごらうま「江^え」の香^{かう}をでござらうまと「行^い不^ふ貫^{かん}

て来る^{くる}「夫^{おつ}」の買^{かい}球^{きゅう}まこと「銭^{ぜに}を出^だす」^{ハテ}碎^{さい}りやうも能^い

て来る^{くる}「夫^{おつ}」の買^{かい}球^{きゅう}まこと「銭^{ぜに}を出^だす」^{ハテ}碎^{さい}りやうも能^い

てごころませら。遠いお寺ごま。ハア方角ハ目黒の蜡せお所

うらまご十五六丁あると聞ま。ヤ夫のまつくひもあう

四つと云て四半九ああるが遠くて早く出さごらうごやうご

併葬ハまきくても近くても一日の漬さゆりてうう竹の周も

達ねやうごさやうくア悪い方角ご子二日だけの葬取アうが

出来よう。肩があらうて。六希兵漬さんも能老へ息

子とあひう。粒が拵て。皆大丈夫あり。娘はとれくふさごげく。王

徳も五六人ある。今往生さんねが。終人のさあめの人も若

い内苦勞。老て。若者も老て。苦

後由五六人ある今性生まねいけるるもの終りのさおめ人も

い内苦勞しこくろ老て樂事をまゐる今の若者の老てくろ苦

勞さる身持が大さふあべとどアス人の馴染どろけ南無

あまごぶらアアなむあまごぶら又へ糸の基ともが蠅のた

ろこやふ初この▲み大人あるまうて横町の草園出たさ

い又まけやうと思つてナニけ盲の基あり太吉あまご一番糖を

祓ぐとせると本と氣で勝つつりて居る「カアそんなうけ

で教てやらう一屎でもくんべい團扇どぶさくいらせてやると

五節句不行程よこまのぞらで「どく今の依れどらうら

悪くしこナア。負ふるつこア。先の冷林どやア丸で勝つお基あごア。

些と又終つとそらご是でも能ふ勝て又せやうつ今死車

角二枚渡しつゆのんごう弱し切ア洒落も出終つ飛車

と角でお基六指ぬつ。とらちの王を死中とて王をそこ合

馬ヲ下待つろつら終つお基あごナア銀ハ惜ひらる桂馬で

とそらちが王あごくつらまくし奴ごやうづり銀あておけバ能

のふつ妙多を指てサ。迹ろく能く迹さ。そとで何をあ

てやらうまやのう一両角を突込り角を突込れとお出るはら

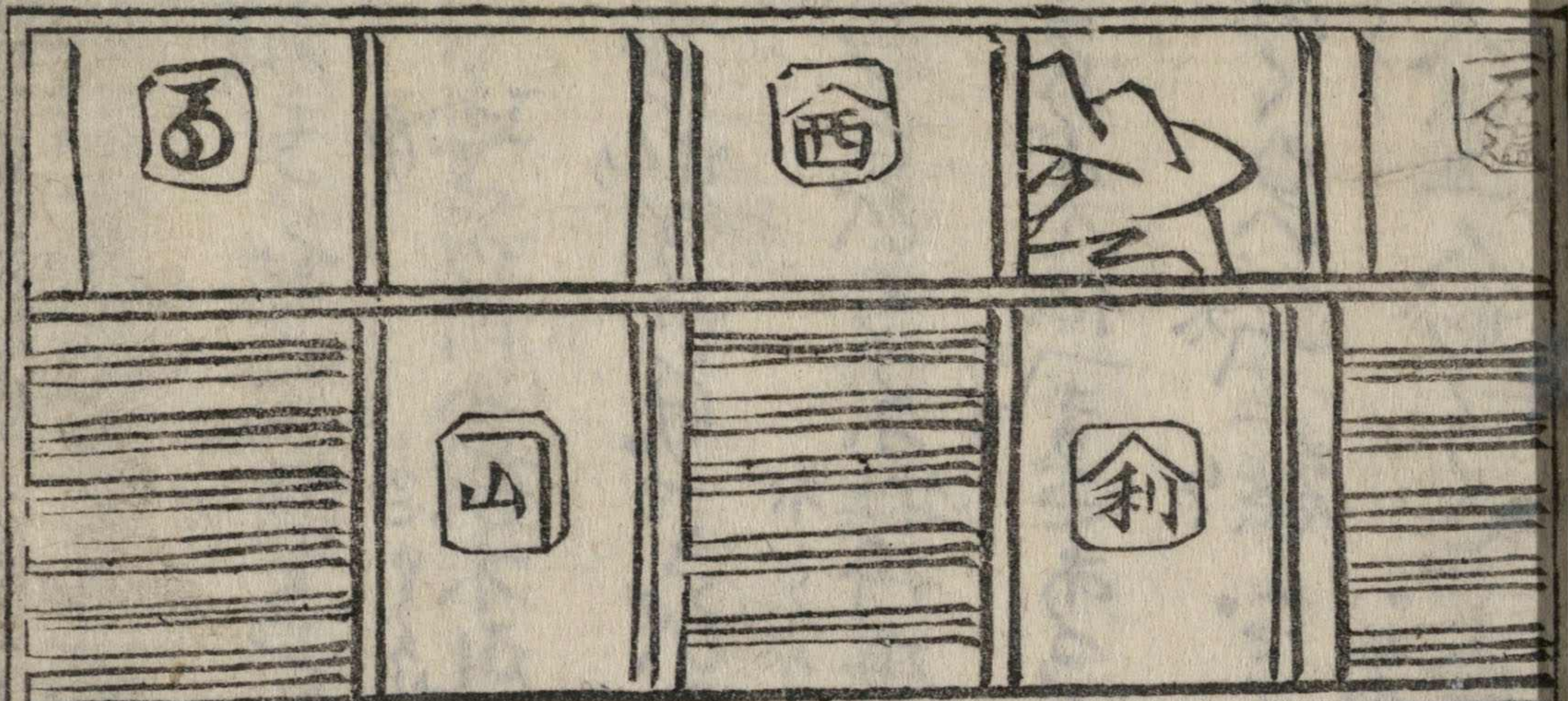
てやらうまやめう一箇角を突込め一箇角を突込めとち出るはる
 うま角を突込めと山山ちまをれさる。フミトがうまあれで丸
 るうがう来るあはく。着てさう尻うびりトまづちんで由書
 又ろト一ツかからまるをしてある。飛車は手ひがうまてさう銀
 を奪ある計畧ご一ツ飛車もいゆぬのさ一ひひ合のね基ハ王を
 借中うとふ考移んで。飛車と角をろろ惜ぐるて居るぜ。駒を
 かと抓で居ると有つらサマシテ一ツだまらて足まきへッ汝
 考不承あうまご。サ早く一移ら。下ひの考休む不似たりご
 下ひと能ひをささと洒落らア。下ひの考休む不似たりご
 と是

何と云ふぞ
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん

おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん



おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん
おまへさん



此計究て好ごぞ先 事へ先 マ先 せく後 マ先 せれく後 せりてさせく

先 知てさせく先 能あく先 マ先 王先 逃先 せく先 迹この内小横木凡先

イマ先 迹この内小横木凡先 としてく先 是でゆ先 くとあ先 せゆ先

まが先 助く先 迹この内小横木凡先 王先 マ先 ども先

後 マ先 び先 牡丹唐草先 引く先 天窓先 び先 マ先 勢先

ま先 ぞ先 仏先 まで先 ある先 角先 を引先 て先 捨先 て先 ま先 づ先 ー先 ー先 後 せ先 れ先 ても先

能く先 ち先 へ先 太先 正先 能先 ぶ先 マ先 以先 して先 捨先 せ先 ー先 ー先 先 せ先 ま先 づ先 ー先 ー先 東西先 へ先

一人先 小五人先 が先 ぐ先 ー先 ー先 大勢先 の智恵先 で先 せ先 れ先 一人先 小肩先 づ先 ー先 ー先 可哀先 や先 く先

さし^トハル^源そこが由^先ハテ竹^先もらふ人^先であらハツ^後マ^後人^後であらハツ

ある^太能^先く^先ツリヤ竹^先もらふ人^先であらハツ^後雪^先隠^先ハ出^先るま

又^先鼻^後の^後ツリヤ竹^先もらふ人^先であらハツ^後雪^先隠^先ハ出^先るま

おて^太から^太ツ^太あ^太れ^太が^太出^太る^太マ^太ア^太待^太ツ^太又^太ハ^太が^太わ^太ら^太ズ^太金^太銀^太で^太も^太ち^太ら^太

た^太ら^太ハ^太エ^太ハ^太▲^太中^太人^太余^太の^太如^太く^太さ^太る^太所^太ら^太う^太か^太ら^太う^太が^太ち^太ま^太ハ^太行^太を^太し^太て^太居^太る^太の^太ハ^太い^太な

を^太よ^太が^太一^太コ^太レ^太太^太吉^太や^太け^太こ^太ハ^太行^太を^太し^太て^太居^太る^太父^太が^太ん^太が^太付^太る^太を^太あ^太り^太け^太て

今^太つ^太ら^太う^太店^太の^太ひ^太ま^太さ^太ら^太う^太て^太お^太の^太が^太ゆ^太る^太の^太を^太待^太て^太居^太る^太ま^太さ^太ら^太ハ^太先^太

お^太の^太ら^太う^太音^太を^太長^太く^太し^太て^太モ^太ウ^太ゆ^太ら^太う^太モ^太ウ^太ゆ^太ら^太う^太と^太思^太ふ^太再^太び^太三^太宝^太

訓らる音を長くしてモウゆらうモウゆらうと思ふふ再び三室

ゆらゆらトヤ移入とあるがんがぢれ出〜なるさうごらうとありつて

ふときで居るふおん三思ひかりも移入能きをもえご飯を食て梳

を突出まことモウなる湯入行ゆとま拭を持て出さがるのらご

思ふ世三の回のと年むらうゑておれふ世俗をうり申せて世が

世らう嫁子故昔そ親をくらからふまごごと時ふご世間の息

子さえごをえごが能あ〜がやうふうあらゑて遊んであ〜者へ

又一人とありマア〜移入るゆける奴ふろくまるぬ考出〜と例が

移入え〜でも移入ね其素をさ〜と飯のくりねるゑごふち其能

夫でさ入常不形ちくぢうまさと人との者へ何れ角を不取

得のありえでござりやまふがあれ無限ちや、ア勢の毛で實の程もござ

アません、おや私に終こく子こへ鬼子とやうでござる。さうが曲まがつゝるの嫌きらな

んぶのふあゑな子を持もちます。さうさ世間せけんの人さるふ私わがが面目めんもく次第しだいも

終しゆうくあまふごこのあでまのい悪あくのが全体ぜんたい友ともが悪あくのうらさ。折角せきかく内うちふ

仕しるをとして号め者ものをぶ、つりご約出やくしゅつふ来きてありません。つらごのありさまを

うらむの思おぼは智ちのちやうとさうしてつらご子をわしとさふ四五日ごにじつも内うちふ居ゐる

から、さのうくとしことあふと、又またへかけ出でし。又またへかけ出でし。志こころて女の

さのさう乾かわくさ、まくあふ命いのちも精せいもけく、りとどや終しゆうくさ、け

あてるも後へ大吉今ぬらアチ今ぬらアチと後入まきゆらけのトオ下る

大吉ホお代エお天あくら井エモえせられナくア石垣イシキへあるをおら

付て死シんシぶシでも志シまシふシがシ往ウのウかウやウまウ昔イへイ死シでも親オヤのオヤ後アトへアト

トト足タへタ死シてシ一シをシまシがシけシ泣ナくナらナくナトトづツのツ相アをアのアあアのアうウらウくウあアのアうウらウくウ

先サキがサキんサキもサキへサキ全ゼン体テイ友トモがトモらラのノうウらウくウアイアイササのノやヤでデごゴんンやヤとトおオんンなナまマのノ中ナカ

かカのノ大ダイ吉キチさんサンおオゆユんンをヲせセ入イ親オヤのノ相アをヲ背セくク物モノトトヤヤあアのノ親オヤをヲ不フ孝コウ

おオまマらラとト老ロウてテ又マタ我ワガがガ子コ不フ孝コウをヲさサるルかカのノぬヌらラくクかカのノ湯ユがガあア

でデ寒サムくクもモらラるル湯ユの中ノでデあアらラるル声コエがガこコとトるルせセあアんンおオナナアアあアのノ座ザ

のノ方カタがガあアらラるル大ダイ山サン其コノ至シ争ソウ留リウ内ナイのノ座ザ

で寒くもろこ湯の中であらる声かこるせ「あんふナア」わねん座

次の坊が来るころら大々々仙臺浄瑠璃ごらう
カスガレのさくらんどの
二入の音入風呂の中

程小室不又九郎判官義経どのぐ島をこて

下らうし扱早其日の出立あの上あ赤地の錦の直衣を引張

下あ紺の布子あどとら引張るり附属ふ内供あ亀井

片岡伊勢駿河西塔の武藏坊彼等あえんどうは供あて尻ら

泥水の流れるやう下らう其翌も下らうし又明後日も

下らうしあつこやうら下らうし扱早内大将も長旅路の支

あれが草臥果ごよ下弁慶何曾をかけべが解くあ無

くどきあきむりやせむ弁慶へは大将のまごの物めいぶくえん隨々謎を解とき

まごといそんちり謎をあそびかけぶらうそもく真来此まのことかけして何なんと

解ときとあきむりやせむ弁慶へはこさ首かたぶけ居ゐらうけ

アソク思按が附しるらけと丈それハ何なんの心易こころやすくそもく真来此まのこと

かけてハ依藤太秀とらふとうと解ときまごの其心そのこころハあんだんべむあんだんべをかろ

つねと解ときうらうらめいぶくえんの大将我折果あつたごよあつた又弁慶へ日本あつた一の謎

解ときの名人あひだごころとびらあひだえんでハ島の浦あひだへ着あひだふりあひだ扱あひだいあひだきあひだ早あひだ

あひだちち起あひだつたあひだ家あひだ不あひだ西あひだ谷あひだの武蔵あひだ方あひだ弁慶あひだ柄あひだも四尺あひだの四尺あひだ

あひだちち起あひだつたあひだ家あひだ不あひだ西あひだ谷あひだの武蔵あひだ方あひだ弁慶あひだ柄あひだも四尺あひだの四尺あひだ

からどらちかき起つてア、さる西谷の武蔵方并豊柄の四尺刃の品足

ありせて八尺の長刀をうつまらむとく、傍あつるの鼻がくあぶ移

であきふらちやア長刀ア何處へはけん出と巾着くはけん

出とちやア爰まら首斬ぶちきやせ平家の軍勢

そら并豊が怒とを、膝の下でふ葉厚く頸の上でふ万歳承と

辻まらるを真額梨割車斬ある切らるやもあり腕を切

らるやもあり、されども怪我あつるりり引、たまらぬと軍

勢ども、そこらあつるの鉄を拾つて纏ぐ、おふ腮のかけを

かへ纏ぐ、かとのかけをへ腮へ纏ぐ、あつるあつるかり切らと

おろづらふ痛いたませぬくくハハ何なにもござりませぬ貴公きこうのちあひまへ

イヤイヤぞんど痛いたもござりぬ併あひ存ぞん既じ同どう士し銜げん合がををしてしてヲヲトト終しゆうぶ

一一ツツそらふ古ふるの吐はきががああららととナナハハツツココリリママ柚ゆのの湯ゆををととれれらら

苦くででふふちちのの今いまそそとと入い汲くみででああららととああららののハハテテめめんんややううまま

ああららとと今いま汲くみづづののううちちるるああどどちちららトト又また一いちちののええででままててそそををととああくくととままいいぢぢんののちちああけけをを

そそららととああららとと今いまそそとと入い汲くみづづののううちちるるああどどちちららトト又また一いちちののええででままててそそををととああくくととままいいぢぢんののちちああけけをを

一一ととああららとと今いまそそとと入い汲くみづづののううちちるるああどどちちららトト又また一いちちののええででままててそそををととああくくととままいいぢぢんののちちああけけをを

一一ととああららとと今いまそそとと入い汲くみづづののううちちるるああどどちちららトト又また一いちちののええででままててそそををととああくくととままいいぢぢんののちちああけけをを

おれが今汲んで来たこの水の匂いどうも今更な匂いがある

「テめんようま」ト又二ツで分るをまま「コヤまで湯をかくと奴をはく

ま」ト上内をま碎るをまのつをまま「おのれあまやうご家あうう何ぞい

湯をきうこりまねいけおれがどうも土柚の皮うナおれがどうも

おれが今汲んで来たこの水の匂いどうも今更な匂いがある

おれが今汲んで来たこの水の匂いどうも今更な匂いがある

「テめんようま」まま「貴さあま湯を進せよう」ハ

いびくをさるからがあるいびくこれ汲まごトの湯をさる

これウおれが今汲んで来たこの水の匂いどうも今更な匂いがある

一目は辨天五目的羅漢ハ
 素うくついでと一目入道
 目づ録をりしども化物と
 とれれむ八つ目もまぎの
 瀧焼にならぬと名を
 目があつて
 やつたあは
 目がかつて
 かつかはづら
 大は松おふんど
 むくしんぶの
 百二首のつ別類
 書のかき
 目おる更
 むぐろくし
 五人の



さとりの城
 用おれどく
 目ハしきもその
 物物々何なり
 あんまりんへま
 一お檢校
 目りりりりり
 多海とらびの
 こららふ
 さおらうの
 垢をむん
 茶黄ハもれ
 かくとあし
 せいさか
 井湯の
 成用心

ありのく
 千のたの
 おささあぐま
 かゆりりり
 おささ

下下下
 下下下
 ありりり



このも借の病イ私ハ瘡毒でござりまさと一瘡毒ハ何と

イマ何も笑ふるもハハハ瘡毒の辛堀とらふるイマ何も

マアそんな物でござりまさと一丈夫ハ能療治があるイマ何をたぐ

まさと一イマ療治がある医者があるイマ一毎日箱を擔つて

呼であぐりイマ一あれをちちぬイマ一まご存ませぬ

一瘡毒治イマ一貴さるイマ一三百六十日目を

睡イマ居るイマ一目を塞で居ても心ハ

寐イマさせぬイマ一懐胎の女の腹が大イマ

とて食イマを食イマ居イマ道理でござりイマ一あるイマ是ハその

等ちがごりつりそちちの人の大おほ赤あか湯ゆ出いつつ無な糸いとなながら

蛸とこふふとららと直ね赤あかののあるある頸あしごりつりこちちののおお赤あか白しろ疹しん

小こ黒くろ疹しん寒さむのの虫むしでで盲めくら人ひとへへ氷こおり疹しんトトととれれままぶぶ疹しんも

ままここええここがが赤あか疹しんとと珍めづららししのの私わたくし小こ豆まめふふ交まじりりで

ごごぶぶららままとと可かりりくく貴き公こうもも瘡かさ毒どくううイイ五ご麻あし疹しん目めへへええりり

ままししててハハ麻あし疹しんハハテテととんんどど物ものがが目めへへををのの時とき不ふ行ぎょう

ととぞぞししひひままししここううイイ五ご何なにとともも中ちゆうまませせぬぬ今いまぞぞんんざざいいままかかごご大だい切せつ

の目めへへええりりままががらら安やす内うちるるふふ無な作さく法ぽうををややつつままごごもも麻あし疹しん

の目(え)らりちるがら安内なるふ無作はるかたのこころや牙

で仕合せ海鹿が目へえりててく咳(せき)や特(とく)ころら目へえりてて眼病

であらうま(イ)ハテ扱(と)るのどくな目へ人間の眼(め)とまると目

えりて眼病(め)ふるてて盲(めくら)ふるたむご

お又(また)入(い)る男(おとこ)小(こ)挿(さ)入(い)るををんてさびあしが(イ)ひちりて(イ)ホイ(イ)バ(イ)あちりの男

を立(た)ておて(イ)松(まつ)をくけ(イ)まごあつく(イ)ダイ(イ)こちりの男(おとこ)ナせ(イ)ころんで

あをあびせ(イ)今(いま)免(めん)る(イ)ころも鹿相(しかさう)ごちり(イ)が(イ)終(お)く(イ)鹿(しか)

相(さう)ご(イ)ころち(イ)のころぶ(イ)鹿相(しかさう)でも(イ)漱(すす)う(イ)が(イ)あ(イ)れ(イ)水(みづ)を(イ)か(イ)けて

鹿相(しかさう)でも(イ)む(イ)湯(ゆ)を(イ)ら(イ)せ(イ)上(う)で(イ)あ(イ)ら(イ)う(イ)け(イ)ら(イ)と(イ)野(の)郎(らう)の

索麩そうめんと男おとこふりかへあひて「あ笑わらふまあわくくあいぞ人ひとみみををかけ

て是これがあんの水みづけれ論ろんどど二人ふたりををぐろあれがあひて對あひて對あひてここはは通とほ

み瓶びん鼠ねずみ落おちてかうふ十ふ濡どどかうくんあらぬ二人あらぐら

待まちて居ゐらうここ番ばん次じ先さき刻ときくく喧けん嘩わのの對あひて欲ほくくここ漸しだく

ののりりてて二ふた人にん一いつ時ときふふ出で来きととととめめのの支しふふ笈ふしをを貸かせ湯のの

中なかをを探さがして見みらうらう二ふた三さん人にんののあららうササクク皆みな覺さ悟ご

ろろ今いまのの二ふた人にん逃にげるるままああががてていい番ばん頭あたま對あひて對あひて今いま見みああと

どどううももささららううトトろろををああががててひひああららくくセセガガカカララノノ人ひとアア痛いたくくららぬぬ

さうさるう... 疔く...

出ぬけふトいなきぐう「アなカから石う軽石でもどら

でももんな對もどトあのままちちぎて「アんどけらちう

人ち四文一合湯豆腐二盃がせれの山でにに濁酒の箱

食めとんど奴ぢやア終くへ誰どこもらてたらとを

つまるアる二日の初湯つまる大可日の夜半まで是

討もらせア云と夏の終く東子ごナアちう云ちやアちら

うくれんどけれど「ハナサまあ能らまイニマカありまでがちら

かどめるるア終くなけ方ハ大体なるるアアアちうりん

考てちんころうがうんこを踏ごかうま面まへで通とほさアま無む

面目まへも程ほどがあらア。何處どこの釣瓶つづみへ引ひかろと野島やしまウ。

水心みづこころもあつた後あと泡あわア吹ふア。己おのれタイ。六十六部ろくじゅうろくぶお立山たちやまの話はなしを

聞きアあアア。あつたつらあどくしんかろふめん久く石曹鉢いしかうはち

の目高めたかあつた支し躰たう相あ應おうま子こ子こをあらかけてるヤアまじも

ごふ鯨くじらや鮪あぢを吞のろうとハ大おほそれと芥子カイ之助のすけア。掘あ枝うの

足代あししろへ家鴨あひるが登のぼらうとりふさむであれおぬてかろこの

胸屎むねうんごと一ひとすまあ能よくううう了しやう筒つづみをるさへ一ひと升しやうあんど。

浴

齋

落
髮
禮



下卷四葉
北川美丸画



おまゝの浄瑠璃へからをる住さんの性根で押してなさん
それが徳ども見物の清が能て一割後るのイマ又ゆ
べも浪花が例の鍋屋で中二階を張るころの餉やも

潜人どもやなせんかん 豊竹麓太夫のりせんかんとの浄土りのこととをわけ
てうきうきとちをむりふよめりてりだまかかろころとをい

▲潜上をいふゆる。浄土りの。大せんかんども東へ持来もよれど餉せんかん
潜人どもやべー。方説こ

めいあゆり御山るるげんざん 豊竹越前椽の方兼太夫替下太夫駒太夫のこをい
東といふ竹本筑後椽の方政太夫住太夫のこをい

を西とちりうめいりまのちんまの東口といふりのん
いさきりちりうめいりまのちんまの東口といふりのん

まごくあのやうな物どもやちの白湯さまはごころどかろ

白湯さまはごころどかろ

くろくされどもゆや浄たり
の三のまきとくろくちろう
「さこのふ大所江多々糸らこがマキの

そくゆり羽田の弁天へ旦つて大表の橋の路へ出とが

くさびれをてこライ金スス〜潮来を聞移くせちらとら

たりり〜金そんな安いドヤ移く是でも大体銭をかけた

習ツこのごア潮来をさらふとらて毎日六七十ヅツ銭を

はくろくア〜竹不はふ〜見あさ〜湯へ這入ッア

聖ハ杵屋のさらひがあらア茶屋〜今〜湯の中

でさららつてそれ〜弾合〜たま〜移く〜ヤるんごら

女湯の方で大ききる番を〜

女湯の方で大ききる声をうてあるやぶるせん「新道の
藝者の内の婆さんごらう」番匠のついで聞かう
こらうアかり〜ん〜ん

畚頭曰

男湯の残綱女湯の光景ありたる
さるぐあゝどももたの編の紙數僅るえ
ハ虫はく〜ん〜ん後編不控ら〜んあり
ふかけまよる女湯の志もろかり〜ん
出来のろ人來春出板を皆さるが
まの内の早仕舞
わで〜ん〜ん

□ 浮世風呂五編

來午春
開板

文化五年戊辰季秋九月脫稿

同 六年己巳孟春正月發兌

文政三年庚辰仲冬十一月再補刻

江戸橋四日市

江戸書舗

新橋富松町

上總屋利兵衛

丹後屋伊兵衛

28089

国立国語研究所



1001952389



99

34

1-2